

高齢者のコミュニティ・ボランティア活動を促す 「無自覚な自己快楽」

— 兵庫県西宮市の香櫨園地区を事例として —

湯 艶*

要 旨

ボランティア活動にはそれぞれ固有の目的がある。しかし、高齢者たちは自分たちの通常の活動の目的を超えて、がむしゃらに強い熱意でボランティア活動をしつづけることがしばしばある。本稿では、そのような動機の背景として、「無自覚な自己快楽」と呼べる側面を取り上げ、その中身を明らかにする。日本の兵庫県の西宮市の香櫨園地区を対象地として調査をした。具体的な調査対象は、「NPO 法人チーム御前浜・香櫨園浜 里浜づくり」、「ふれあい配食」、「ひろばカフェ」、「神戸・灘 おもちゃ病院」、「いきいき体操」である。これらの調査地を通して、目的意識に基づく動機とは全く異なる、動機の奥にある“心のかたまり”のようなものと表現できるこの無自覚な自己快楽が、ボランティア活動、とりわけ高齢者ボランティア活動での動機づけで強く作用していることが判明する。

キーワード：高齢者、ボランティア、コミュニティ、ボランティア活動、動機

1 問題設定

筆者が目的のない動機ということに関心をもったのは、著名な政治学者、佐々木毅・金泰昌の共編になる『公共哲学7』に収録された鳥越皓之の論文「ボランティアな行為と社会秩序」に刺激を受けたからである。そこで鳥越は阪神淡路大震災における被災者としての経験から、被災地に遠くからやってきて、自分たちの横に単に立っ

*大手前大学大学院比較文化研究科

てくれたその事実だけで心の支えとなり、涙が出そうになった。そしてその人たちは「止むに止まれぬ」動機からやってきたのだと指摘する。そしてつぎのように言う。「これを社会的に見ると難しくなってくる。“止むに止まれぬ”というのは“目的”がない。例えば里山を守るためという目的」をもつ「ボランティアとは違う」（鳥越皓之、2002、pp. 231-239）という。

筆者は阪神淡路大震災というような大災害にかぎらず、ボランティア活動にはこの「目的のない動機」があるのではないかと仮定した。目的のない動機が、鳥越の指摘のように「止むに止まれぬ」ものなのか、それとも異なるものがあるのか、それは不明であるが、西宮のボランティアを分析することで、この「目的のない動機」とはなんであるかを明らかにしたいと思った。これが本論文の課題である。

よく言われるように、ボランティアには自発性というものが不可欠なものである。そして「人間の自発性を考察するにあたり、それが関与する次元として、試みに〈動機づけ〉と〈意味づけ〉という二つの次元を想定する」（海野和之、2014、p. 3）と海野が指摘するように、動機というものが、意味づけと並んで、ボランティアを考えるときにとても大切である。

この動機に言及をしていて、かつ本稿の課題である「高齢者のコミュニティにかかわるボランティア活動」の代表的な論文として、田中共子・兵藤好美・田中宏二「高齢者援助ボランティアにおける活動の動機と効果—ソーシャルサポートの交換の視点を中心に—」、伊藤忠弘「ボランティア活動の動機の検討」、森保文・森賢三・犬塚裕雅他「参加したいボランティア活動の種類と動機の関係」などがある。それらは日本の高齢者のコミュニティの研究において、高齢者がコミュニティ活動に参加する動機を分析したものである。

そこではどのような動機によって、高齢者がコミュニティ活動に参加するかを分析している。たとえば田中共子らによると動機というものは、大きく向上動機と慈愛動機に分かれる。これらは自己に焦点を当てた向上を目的とした動機と、他者に焦点を当てた愛他的な動機のことである（田中共子・兵藤好美・田中宏二、2007、p. 66）。この愛他的動機は、もしかしたら、目的のない動機かもしれない。

また伊藤忠弘は、ボランティア活動を継続している人にとって、その動機が変容していくだけでなく、意識される複数の動機をいかに調整して統合しているかを検討する必要性を指摘している（伊藤忠弘、2011、p. 53）。この「動機が変容する」という事実は、目的のいわば“揺れ”が想定され、複数の動機というものも、目的があってそれに基づいて動機付けられるということを勘案すると、目的が不明瞭になっているかもしれない。

そういうことを考えると、これらはともに貴重な指摘である。

森保文らは高齢者ボランティア活動にはそれぞれ固有の目的があり、その目的に合わせて動機があるため、ボランティア活動全体に共通する動機はなかったと指摘している。すなわち、これは目的のない動機というものがないという指摘であり、そのため共通する動機がないと言っている。「共通する動機がない」という指摘は、裏を返すと「目的のない動機はない」という前提に立っている。これは本稿の仮説に対置する意見であるので、刺激的な指摘であると言えよう。

筆者の別の研究史の論考「日本における高齢者ボランティア研究の現状と課題」(湯艷, 2021)で複数の動機の関係性やそれらの種類を検討した(同論文, pp. 245-257)。それをさらに深める試みとして、先に述べた本稿の目的をここで改めて確認しておきたい。

なぜ、高齢者はがむしゃらに強い熱意で活動をしつづけていられるのだろうか、という疑問がある。高齢者たちにはそれぞれ、自分の体力や精神力を超えるほどの頑張りや日常のコミュニティ活動でしている人たちが見受けられ、また、このような人たちがいるからこそ、コミュニティが活発になっているのである。この「がむしゃらさ」の背景を探ることが本稿の課題であり、そのための作業仮説としてここでは、鳥越が「止むに止まれぬ」動機と表現する側面が強く作用しているとの見方をとる。以下では、兵庫県西宮市の香櫨園地区を対象地に事例を取り上げて分析し、この仮説を検証したい。

2 香櫨園地区とその地区のボランティア活動

香櫨園地区は、西宮市の南西部に位置し、南は大阪湾の一部である香櫨園浜に接し、西は芦屋市と境界を接する閑静な住宅地である。この地区は、香櫨園小学校区の12¹⁾の町から成り、人口は約13,363人で、このうち65歳以上の高齢者は2,396人で高齢者比率は約18%である(西宮市町別年齢5歳刻み住民基本台帳ホームページ、2021年)。

この香櫨園地区は、郊外の都市住宅地であり、日本でコミュニティにおける高齢者ボランティア活動を分析する場合の典型的な場所のひとつであるのと、筆者が属する大学の近隣であるので、調査が便利であるという理由でこの場所を選んだ。

兵庫県西宮市のボランティア活動についての特性とボランティア組織について簡単に紹介しておきたい。

まず、この地域は1995年1月の阪神淡路大震災を経験した地域である。そのときのボランティアの経験があったからこそ、現在高齢となっても各分野のボランティア活動に参加しているという人もいるぐらいである。すなわち、高齢者ボランティアが盛んな地区なのである。

この地区で、高齢者たちはさまざまな活動をしている。たとえば喫茶店の運営、子



写真1 わがまちクリーン大作戦 (2019年12月8日 筆者撮影)

どもに対する環境教育、玩具病院、生き生き体操、ふれあい配食などである。

阪神淡路大震災のときはどんな状態であったのかを、ある地域のリーダーからその経験を聞き取りした。それをここに記しておこう。

「1995年1月17日5時46分に発生した巨大地震により、6,434人が亡くなった。10万5千戸の家屋が全壊し、14万4千戸の家屋が半壊した。電気・ガス・水道のライフラインが止まり、阪急・阪神・JRの鉄道がストップし、高速道路も橋脚が倒壊して通行不能となった。

震災発生直後、倒壊した建物の下敷きになった人々を助けだすために、隣近所の人たちが協力し合って懸命に救出活動をした。また、たまたま備蓄していた家庭の水や食糧は隣近所の人たち同士で分け合って命をつないだ。住む家を失った人、間断なく続く余震に怯える人たちは近隣の小学校体育館や集会施設に避難して、寒空の中で辛い避難生活を送った。

公共交通機関がストップし高速道路も使用できないため、道路はあふれる車両で身動きが出来ないほどの激しい渋滞であった。1日平均2万人、3ヶ月間で117万人のボランティアが全国から集まった。日本では、この年は“ボランティア元年”²⁾と呼ばれ、その時生まれたボランティア精神・ボランティア行動は、その後に発生した東北大震災や熊本地震、相次ぐ自然災害などの復旧・復興支援に活躍している災害ボランティアに引き継がれていると思う」。

このようにこの震災があった1995年が“ボランティア元年”とよばれたように、この地域から日本では、本格的なボランティア活動がはじまったのである。

そのときのボランティアの経験があったからこそ、現在高齢となっても各分野のボ

ランティア活動に参加しているという人もいるぐらいだと地元の人たちは言っていた。

この地区では、高齢者たちはさまざまな活動をしている。最初に代表的な活動グループの活動概要を紹介しておこう。

「NPO 法人チーム御前浜・香榎園浜 里浜づくり」³⁾

このグループのボランティア活動は「チーム里浜づくり」、「ビーチ・クリーニング」、「出前講座」の3つに分けられる。

「ビーチ・クリーニング」は雨のない日に毎朝メンバーがゴミを拾う作業をする。毎日曜日に10時から12時まで約8人のメンバーが集まってゴミの収集と除草を行う。ゴミの収集実績（H28年度）として、45Lゴミ袋526袋、90Lゴミ袋729袋、草束を23束回収した。延べ年間898名が参加した。

「出前講座」とは近隣の小学校（香榎園小学校、浜脇小学校）の3年生児童を対象



写真2 出前講座での全体説明（2019年11月29日 筆者撮影）



写真3 出前講座でのボランティアによる説明（2019年11月29日 筆者撮影）

に御前浜・香榎園浜で自然環境学習を行っていることを指す。海浜植物の観察、海辺の生き物（カニ、貝など）の観察、西宮砲台の見学、凧あげ、炭拾い等を行っている。

凧あげは子どもたちに自然の風を知ってもらう。御前浜・香榎園浜は現在でも自然の砂浜の残る貴重な海岸なので、それを子どもたちに体験してもらう。西宮砲台など歴史にあふれている国の文化財も知ってもらう。

この法人は小学生向けの里浜環境教育をおこなっている。具体的には、掃除や草むしりなどである。

参加者はここでのボランティアをすると、情報の交換ができる、ネットワークを作ることができる、自然に接するこの作業は、気持ちがいいという。毎回掃除するのは5、6人である。ただ登録されているメンバーは20人ほどであるという。ここでよく言われるスローガンは「好きな時に、好きな人たちが、好きなところをやる」である。

「ふれあい配食」

西宮市香榎園地区社会福祉協議会が開いた高齢者ボランティア活動の一つとして「ふれあい配食」⁴⁾がある。それは6年前にスタートした。ふれあいを通して、地域の高齢者を守るという趣旨である。具体的な活動として、利用者の高齢者が自治会を通してチケットを10枚単位で買う。1食で消費税込みで600円である。ボランティアは、「こんにちは！」と見守りをかねて必ず声掛けする。訪問の高齢者ボランティアは安否確認や簡単なお話をするとする。

お弁当の内容はカロリーと塩分が控えめのおかずを5品とご飯である。訪問の高齢者ボランティアのスタッフが夕食のお弁当を週1回「月曜日」に希望者の自宅へ届ける。訪問時間は毎週月曜日の午後2時から4時の間である。対象としては、1人暮らしの高齢者（障害者）、家族と別々に食事をする高齢者、高齢のご夫婦である。それ



写真4 ふれあい配食の食事内容 (2019年12月9日 筆者撮影)

に携わる高齢者ボランティアは主に7人である。年齢は平均で70歳である。毎回配食の依頼を受けるのは26~27人ぐらい。毎週一回なので、対象は毎月のべ100人ぐらいで、1年で同1,200人ぐらいの計算になる。

「ひろばカフェ」

ひろばカフェ運営の最大の特徴は、有償ボランティア（現在12人のスタッフが午前・午後に分かれ、それぞれ2名ずつシフトに入る仕組み）であり、熱意、チャレンジ精神、助け合いの心によって運営（活動）が推進されていると関係者が言っていた。

スタッフの主要メンバーは、ひろばカフェの最初の開設準備段階から計画作りに参画している。どんなイメージの喫茶コーナーを創っていくか（基本コンセプト）、そのイメージに合わせてどんな施設・什器・備品（調理器具・テーブル・椅子・カーテンなど）にするか（設備、備品コンセプト）、どんな品目をいくらかで価格で提供していくか（メニュー）、接客では何に気を付けるか……などがくり返し論議されて、ひとつずつ決められていった。その中で「ひろばカフェ」というネーミング、「ちょっとおしゃれで、ほっと一息できる憩いの場」という、基本コンセプトが固まっていた。

この「スタッフが主体的にひろばカフェの運営に関わり、皆の知恵と力を合わせて、よりよい運営をしていく」という組織風土が今日まで引き継がれており、ひろばカフェ運営の改善方針（方針変更）は、2ヵ月に1回開催されるスタッフ会で協議されて、その結論を上部機関である「喫茶部会」に報告・提案することになっている。

ひろばカフェは「県民交流広場事業」小学校区を単位として、施設整備費1千万円、活動費300万円（60万円×5年間）を兵庫県が補助し、地域活性化を目的として2005年に始まった県の事業である。

「神戸・灘 おもちゃ病院」

日本玩具病院協会は、壊れた「玩具」を原則無料で修理し、新しい生命を与えることに価値を見だし、生きがいを感じているボランティアグループである。それは1996年に全国組織化された。

玩具病院の活動内容は得意技を生かすボランティア活動である。玩具ドクターの会員は、長年の経験や専門技術を活かすことに誇りを持って地域玩具病院でボランティア活動を行っている。子どもから「ありがとう！」の声がかかると嬉しいという。壊れた玩具を直すことによって、資源の消耗を少しでも減らすことは、大切なリサイクルであり、それは消費者の使い捨ての意識の改善にも役に立つという（日本おもちゃ病院協会ホームページ、2021.1.31）。



写真5 神戸・灘おもちゃの病院 おもちゃを修理する高齢者ボランティア
(2019年11月16日 筆者撮影)

「神戸・灘おもちゃの病院」は神戸での玩具病院のボランティア団体である。この団体には玩具ドクターが50名ほどいる。神戸・西宮地区10か所でおもちゃ病院を開設し、おもちゃの修理をしている。2018年からMさんはおもちゃドクターとして、香櫨園おもちゃ病院を開設した。毎月第3土曜日10時～12時、ひろばカフェ内の大テーブルを利用して、子どもたちにとって大切なおもちゃを無料で修理し「物を大事にする心」を育てている。

「いきいき体操」

西宮いきいき体操は、地域住民がグループで、身近な場所において行う高齢者向けの筋力向上を目的とした体操である。手首や足首におもりをつけ、DVDの映像にあわせて行う。いきいき体操の効果として、体操初回と1年後の体力測定効果を比較したところ、80%以上の参加者が改善した。また、体操に毎週参加することで、「友達の輪が広がりました」と言った声が聞かれ、健康づくりだけでなく、仲間づくりと地域づくりに繋がっている。香櫨園地区でも高齢者のために、週に一回、おおむね30人ぐらいが集まり、だれでも参加できる体操をしている（西宮市健康福祉ホームページ、2021）。

3 高齢者ボランティアの活動事例

一つ目として「ひろばカフェ」の運営から説明をする。

普通は喫茶店と言えば、多くの人が抱くスタッフの印象としては若い女性の姿であろう。しかし、ひろばカフェに行ってみると、見られるのは年を取った高齢者のボラ

ンティアの女性である。最高齢の女性は79歳である。しかし、年を取ってもみんな元気にひろばカフェでボランティアをしていて、元気にお客様に声をかけて、積極的に対応している。

たとえば、図書館の近くに住んでいたお婆さんは亡くなる前は、晴れる日は息子さんが車いすを使ってひろばカフェを利用していた。お婆さんが来ると、当番の高齢者ボランティアはだれでも優しく対応をして、いろいろ話を聞いたりした。そしてそのお婆さんはひろばカフェの音楽を聴きながら、上を仰いできれいな青空を見るのがすごく好きになった。

ここに来た客にとっては、ここは夙川公園付近の安らぎの場所である。ここは西宮市民図書館を利用した人にとって疲れたときに、休むところである。ここはまた子どもを連れて本を読んだ後で軽食を済ませるところでもある。さらに一週間での仕事に疲れると、週末に友達の間で静かにおしゃべりができる場所でもある。

ここで働いているボランティアを見ていると、客が落ち着いている感じがする。たとえば、ある客は長野県の出身で、ちょうどこのスタッフのひとりも長野県の出身であり、いろいろな長野県の話が出てきて、故郷への恋しさが放たれて、ホームシックがだんだんなくなったという。

ひろばカフェはおしゃれな喫茶店ではないが、きれいで、おいしいコーヒーが飲めるところで、机の上に毎日小さくて白くて透明の瓶の中にきれいな一輪の花と特別な草などが飾られている。それにより、高齢者ボランティアは細かいところまで考えていることが分かるし、ボランティアたちはたいへん頑張っている。またBGMの音楽で気持ちを軽やかにさせることができるようになってきている。家庭料理みたいな昼ご飯のメニューもよく考えてあり、旬の味のご飯を提供している。それらはボランティアたちがいろいろ工夫して考えたメニューなのである。

なぜこのひろばカフェがこんなに人気があるかという、中心リーダー格のTさんと他のリーダー、そして1人の建築士のボランティアが一生懸命に頑張り、ひろばカフェの設計とひろばカフェの運営に力をそそぎ、行き届いた管理があるからである。

また、大切なことであるが、ここでの高齢者ボランティアはひろばカフェに来て自信がついたという。特にここで一番年齢が高い女性は二年前ご主人がなくなってしまった。ご夫婦はすごく仲が良く、一時彼女はとても悲しかった。もしひろばカフェのボランティアという仕事でなかったら、たぶん毎日悲しい日々を送っていたかもしれない。しかしひろばカフェのおかげで、自信をつけて、楽しい毎日を送っている。ひろばカフェで働いているリーダーがいうには、ここでのボランティアのスタッフはボランティアの仕事で生きがいを再発見したという。またいろいろな人に出会うのが楽しいようだともいっていた。

二つ目として「NPO 法人チーム御前浜・香櫛園浜 里浜づくり」の活動を検討する。

ここでのボランティアでは、まず「出前講座」である。

「出前講座」がなぜ興味深いかというと、高齢者たちは子どもを連れて風あげをしたり、海浜植物の観察、海辺の生き物（カニ、貝など）の観察、西宮砲台の見学などをさせる。子どもの教育に携わるのは学校の先生と保護者たちだけではなくて、いろいろな地元の高齢者ボランティアと一緒に手伝って助けていることになる。それは子どものいろいろな社会勉強になるし、子どもたちは愛情にあふれた社会環境に囲まれてすくすくと育っている印象をもつ。

高齢者たちは長い社会経験があるので、子どもに対してたんに環境教育だけではなくて、いろいろな知識を与えることができる。そしてその経験を子どもたちに教えたりするので、子どもたちは高齢者の知恵を感じることができるのである。

たとえば、一緒に三年生の子どもたちを連れて風あげをするときに、子どもはすぐに風があがった様子を見たがった。しかし、実際の現場に行ってみたら、はじめは風がなくて、子どもたちは風を待つうちに疲れて休んでしまった。そんなときに、高齢者ボランティアが言ったのは「みんな静かに待っていて、風がもうちょっとするとやってくるよ。どんな時でも急がないように」である。

こんな短い言葉であるけれども、子どもに対して「どんなことが欲しくても、落ち着いて待つ道理を伝えた」とボランティアの人が言っていた。

そのうちに風が来て、だんだん風があがるようになって、子どもたちは興奮して、大騒ぎをした。高齢者が説明することもぜんぜん聞かないで。その時だんだん子どもたちは風の強さのせいで、咳が出てきて、不調を訴える子が出てきてしまった。それで高齢者のひとりが子どもの先生に対してこう言った。「やはり風あげという活動であるから、前もって風邪気味の子ども、また咳が出る子どもを控えたほうがいいのか」というアドバイスをした。

ボランティアのリーダーの多くは孫を持っているから、逆に現場の先生方にも「子どもに対していつでも行き届いた配慮が必要なことを伝えた」という。その日も担当の若い先生にとっても成長の機会になったのではないかという感想をリーダーは言っていた。

「ビーチ・クリーニング」の活動はつぎのようなものである。雨のない日に毎朝メンバーがゴミを拾っている。日曜日なのに、掃除されて、音を出して、「うるさい」という苦情を言った住民もいた。そのため、警察官が呼ばれた。その時、ボランティアのひとりはずごく怒ってその住民と喧嘩になってしまった。

かれが怒ったのは、一生懸命に頑張っ浜をきれいにしたことに、苦情をいわれた

からであった。これに対して住民たちは、せっかくの日曜日に朝寝坊をしたいということで、苦情が出たのであった。また、雑草を刈り取ったときには、「海岸には貴重な草を置いてほしい」という反対意見もあった。高齢者のボランティアたちはすごく迷った。しかし、リーダーが言ったのは「浜がきれいになって、自分もすがすがしい気持ちになる」。「今では浜は完全にきれいになりましたね」と。

筆者の質問に対し地元の人たちの「マナーがよくなってきたのはいつからと説明できません。いつの間にかとしか言えませんねえ。きれいになったので捨てにくくなるものですよ」と答えていた。

「それに、台風時には、いつも応援していただいている大阪ボランティア協会に応援を依頼した。また別の団体も多くの人を集めて対応してくれた。市も特別態勢で臨んでくれた」。高齢者ボランティアたちが浜をきれいにしたために、多くの市民たちが浜を大事にする意識が育まれたという解釈である。

リーダーがいうには、かれらボランティアの人たちと付き合っているうちに感じたのは彼らが年を取っても負けない気持ちがあって、何かをやっても必ず精いっぱいやることだ、そうだ。

たとえば、「NPO 法人チーム御前浜・香榎園浜 里浜づくり」を運営するために、一定のお金が必要である。彼らはインターネットでセブンイレブン記念財団の助成金情報を検索して申請した。そのための書類作成に多くの時間を割き、また仕事に集中した。さらに自分で懸命にPPT作成をし、会社の面接会で懸命に説明をし、結果として、そのプログラムのお金をもらった。そのため去年の「NPO 法人チーム御前浜・香榎園浜 里浜づくり」の活動の金銭的保障ができたのである。

またリーダーのひとりから聞いたボランティアの動機について。彼が言ったのは「ビーチ・クリーニングは主に除草することですが、春から夏にかけては除草の早さが生えてくる速さに追いつかないので焦りながらビーチ・クリーニングをしている。しかし、自分のやった除草の成果は目で見て判りやすいので、成果を楽しめながら除草している。責任を負って実施しているわけではないので気楽である。自宅に居るだけでなく、仲間と一緒にテニスしたり、屋外の自然に触れながらの除草は植物の生態を身近に感じる事ができ、すがすがしくも感じる。色々な植物の名前を知ることもしみの1つである」。

高齢者ボランティアはそのボランティアをやっているうちに、自然への楽しみも一つになるのだらうと推察される。自然の楽しみとともに、生きがいを感じる。ボランティアの彼が言ったのは「ビーチ・クリーニングをするのは、良く歩いて健康を貰い、浜がきれいになってすがすがしい気持ちになります。そして皆さんから喜んでもらえます。“している”のではなく“させてもらっている”である」と。

また、ここでのボランティアの多くは一緒にテニスをするメンバーたちでもある。知らず知らずに、コミュニケーションをしたり、情報を交換したりして、信頼感があって、チームワークの形成ができて、一緒にボランティアをする雰囲気を作った。

そして、ボランティアのリーダーの2人が言ったのはボランティアを続ける理由は「自分がもし今日体が良くない場合、今日行かなくてもいい。今日すごく体が良さそうで、いっぱいやる」ということである。自分のペースでやるのが続けられる理由である。またボランティアグループのスタッフの間での友情は素直で、競争関係がなくて、お互いに交代してやりたいときやる。それはボランティアを長年続ける理由である。つまり高齢者のボランティア活動に従事する動機はボランティア活動を自分のペースに合わせて従事しつつ、友情関係を築きながら行うということである。

三つ目は「ふれあい食事」である。

ふれあい食事は独居高齢者のために、一週間に一度、高齢者にお弁当を配ることである。お弁当を通して高齢者の安否が確認できる面白いアイデアである。お弁当を配る作業をした高齢者ボランティアの中の1人のMさんは、今年で72歳である。彼が配ったお弁当の相手は8歳のご夫婦である。夫婦のうち妻の方とMさんは共通の趣味は株の話である。同じ趣味で、お弁当を配りながら、二人ともいろいろ話が盛り上がり、お互いに信頼関係が築けて生きがいになる。

毎週、なにが期待できるものがある。高齢者ボランティアのMさんにとっても一週間に一回株の最新の情報を集めて女性に伝えて彼女の笑顔を見て、元気であることを期待している。

高齢者ボランティア活動に参加して、お弁当を通して、孤独から離れて世間からの温かさを感じることができるという。

四つ目は「いきいき体操」である。生き生き体操は一週間に一回高齢者を集めて活動をする。興味深いのは、生き生き体操の後で、その高齢者ボランティアはカラオケをしたり、自分の才能を生かしたりして高齢者たちを楽しませることである。

例えばその1人の高齢者はもともと小学校の先生であった。笛ができて、毎回彼の番になると、彼が笛を吹いて、高齢者たちは歌を歌ったりする。それはすごく盛り上がりしている。生き生き体操の後でみんなは合唱会にも参加できて、体と心も全部で休ませることができる。毎回終わる時、快くなって、新しい一週間に向かって、みんなが頑張る意欲がもらえるという。

五つ目は「玩具病院」である。

玩具病院に参加するドクターは5人ぐらいである。その中で最高齢は84歳のNさんである。彼はもともと建設会社でエンジニアとして勤めた。60歳になって定年になった。彼は、子どもを接待するのが好きなのだそうだ。それで定年になってから神戸科

学館でボランティアとして生徒たちに展示物を紹介した。4年前から神戸・灘玩具病院に入るようになって、一か月に30個ぐらいの玩具を修理する。

子どもと保護者が来ると、彼はまず受付で微笑みながら保護者から手渡された玩具を真面目に見ながら確認する。彼が言うには「歳を取っているうちに、子どもの顔を見て元気をもらって嬉しくなる。」と。「子どものために、何かできることをいつも考えて、それが生きがいになる」と言った。それで玩具病院に来た。11月16日に来た母親と娘さんはおもちゃの「自動販売機」を持ってきた。受付で手続きをしてから、Nさんが1人の高齢者のボランティアのところに案内した。お母さんが言ったのは「この自動販売機は上のお姉さんがこの子にあげた玩具です」。

「よく娘さんのために玩具を買うのでしょうか」と私が聞いてみた。その母親は「あまり買わない。ただクリスマスとか、お誕生日ぐらいの時だけ買ってあげる」と答えた。また「その自動販売機がすごく気に入っていて、修理に来た」と答えた。

「もし、修理ができたなら、嬉しいの？」と筆者はその娘さんに聞いてみた。彼女が真面目に1人の高齢者ボランティアの修繕作業の様子からとても期待をしていることがその様子で分かった。ドクターの高齢者ボランティアは一生懸命に道具を使いながら自動販売機がなぜ動かないのかをチェックしていた。やはり目の前で診断して、すぐ修理できないそうである。それでその保護者と娘さんに「この玩具は入院する必要がある」と伝えた。

もう一人の高齢者ボランティアは玩具病院のリーダーである。彼はここで待っている子どものためにたくさんの手作りの玩具を見せながら対応している。彼の説明によると、玩具病院は日本全国で行われているボランティア活動のひとつである。高齢者たちが子どものために何かできることがあるのか、という考えから玩具病院が生まれた。

玩具は時代によって異なるものの、玩具は子どもの時の貴重な思い出である。お姉さんから受け継がれても、妹さんにとってもその玩具はもっていてうれしいものだろう。その玩具にたいしての愛着が受け継がれるのだと言えるかもしれない。

高齢者ボランティアは一生懸命に自分の技を生かして子どものためにできるだけ玩具をもとの様子に戻れるようにしようとするのは本当にすばらしいことである。高齢者たちはそのボランティア活動を通して自分はまだ頭がしっかりしていて、まだ若い人と同じように技術を生かすことができる。もし玩具をちゃんと修理できたら、達成感があるし、生きがいも感じられるという。

日本の高齢者ボランティア達はいろいろな分野で活躍していて自分の力でコミュニティに貢献している。多くの高齢者達が言ったのは高齢者ボランティア活動があつて、毎日充実した日々を送っていて、家に閉じ込もっているよりいい。素朴な感じ方

であるけど、一人ひとり自分の力で子どものために、高齢者が相互に高齢者のために一生懸命に頑張っている。

4 結論——目的のない動機について

1の「問題設定」で述べた「目的のない動機」とは活動目的が結果的に明瞭でなくなったか、消滅しているものを指す。ボランティアの活動は言うまでもなく、その組織のボランティアの目的がある。だが、事例をつぶさにみていくと、本来の目的とは異なる動機があることが分かる。鳥越皓之が述べた「止むに止まれぬ」もそうだろうが、それとは異なった何かもある。それはなんだろうか。

筆者が想定しているボランティアの本質的要素をめぐっては、示唆的なものとして、「異なる他者と支えながら生きる」(西山志保、2005、p.3)や「ボランティアは個人化社会における“連帯の体現者”としての意義」(三谷はるよ、2016、p.19)という指摘がある。ただし筆者は、それらとは若干ニュアンスを異にするものの作用をここで強調したい。

またしばしば動機は利他主義的なもの、利己主義的なもの、そのふたつの混在した複数動機的なものに分けられる(桜井政成、2007、pp.23-27)という指摘もある。だが、すでに見た高齢者ボランティアたちの体験談は、これらの指摘に適合しつつも、なにかこの解釈では割り切れないものを残している。それはなにであろうか。

それをあきらかにするために、1節の問題設定のときに指摘のあった愛他的動機などを念頭におきながら、3節の「高齢者ボランティアの活動事例」から、まず、ポイントを3つにまとめよう。

1つは、人間相互の絆というものをとても重視して、その絆の維持に高いプラスの評価を与えていることである。たとえば、2節で「ここでのボランティアは多くは一緒にテニスをしたメンバーたちである。知らず知らずに、コミュニケーションをしたり、情報を交換したりして、信頼感があって、チームワークの形成ができて、一緒にボランティアをする雰囲気を作った」という。この背景にはリーダーによる絆形成への配慮としてテニスの活動があったのであるが、ともあれ、絆の維持のために、おもいつくことはなんでもするという活動の多様性と、人間相互の親密性を生み出しおり、そのためか、現在も彼らは一緒にテニスをしている。

自然に築かれる絆もある。「お弁当を配りながら、二人ともいろいろ話が盛り上がり、お互いに信頼関係ができて生きがいになる」。このような事例である。このような絆を媒介として、「自信をつけて、楽しい毎日を送っている」ということになる。

2つは、活動する高齢者はいわば「主役」となっている。このばあいの主役とは自分たちが活動をするからこそ、状況が変化するという「変化を促す主体」を意味している。たとえば、ビーチ・クリーニングで一部の住民と小さな諍いを起こすが、あるリーダーが言ったのは「浜がきれいになって、自分もすがすがしい気持ちになる。(中略)。マナーがよくなってきたのはいつからと説明できません。いつの間にかとしか言えませんねえ。きれいになったので捨てにくくなるのですよ」と答えていた。この「自分たちが」動くことで、周りが人間の信頼と環境美化を生み出すという体験である。

3つは自分たち自身に直接かかわることだが、「心のやすらぎ」を覚えるからである。元小学校の先生が「笛を吹いて、高齢者達は歌を歌ったりする。それはすごく盛り上がっている。生き生きの体操の後でみんなは合唱会にも参加できて、体と心も全部で休ませることができる。毎回終わる時、快くなって、新しい一週間に向かって、みんなで頑張るという意欲がもらえる」。また、「歳を取っているうちに、子どもの顔を見て元気をもらって嬉しくなる」。「子どものために、何かできることをいつも考えて、それが生きがいになる」などもそうである。ただ生きがいと言えば、先ほどの桜井の分類の利己主義的動機とも言えるかもしれない。ただ、阪神淡路大震災やその他のさまざまな厳しい経験をしてきたかれらの心のやすらぎや事例でも出てきた楽しみと表現されているものは、本人もそうだが、観察者にとっても、その気持ちが分かってもなかなか言葉で表現しがたいものである。

ともあれ、たしかにこれらは「福祉」や「清掃」のためという明確な目標ではないし、抽象的な動機である、利他的や利己的な動機といってもしっくりこないものである。そこで、ボランティア活動の本来の目的から離れた、このようなものがあってこそ、ボランティア活動はつづけられていることがわかる。それは彼らの言葉を借りれば「好きだから」「出会いがあるから」「若い者に負けない気持ちがあって、精いっぱいやる充実感」「孤独を離れた世間からの温かみ」というようなさまざまな表現がある。それらを思い切って一言にまとめれば「無自覚な自己快楽」ではないだろうか。そしてこの「無自覚な自己快楽」を高齢者が持続できるのは、もちろん快楽そのものもあるが、それ以外に、3節の事例で示したように、ボランティア活動は、他から強制されたものではなくて、自分の体の調子に合わせて活動できること、また「ボランティアグループのスタッフの間での友情は素直で、競争関係がなくて、お互いに交代してやりたいとき」にやれることであろう。

すなわち、目的のない動機として鳥越のいう「止むに止まれぬ」もそうだろうが、それは大きな災害などの特殊な環境で顕現しやすいものだと思う。それ以外にいま述べた「無自覚な自己快楽」がとりわけ、高齢者ボランティアには存在すると思われる。

注

- 1) 12町は松下町、屋敷町、弓場町、川西町、中浜町、堀切町、上葭原町、中葭原町、下葭原町、大浜町、川東町、川添町である。
- 2) 川村匡由によると、「1995年1月17日5時46分ごろ、マグニチュード7.2の地震が発生、淡路島と神戸を中心に震度6～7を記録し、死者行方不明者6,427人、家屋の全半壊25万7,890戸、焼失家屋7,465棟を出した震災。淡路島から神戸にまたがる地層の活断層が原因とされたが、この地震で、災害とボランティア活動の連動の難しさと重要性が認識された。阪神淡路大震災では、ボランティア活動に従事した人達は延べ約200万人以上にのぼった。その結果、この年を遅まきながらも“ボランティア元年”といわしめた」（川村匡由、2006、pp.32-33）という。
- 3) 特定非営利活動法人チーム御前浜・香櫛園浜里浜づくりの事務局長枝光宏征によると、「海辺と人との多様な付き合い方を大切に、御前浜・香櫛園浜をかけがえのない地域の宝“里浜”として、よりよいかたちで未来に継承することを目的とする。具体的な事業としては、“浜を守る事業”である。たとえば、ゴミのない浜の環境を守る事業である。“浜を使う事業”である。たとえば、遊びを通して学ぶ環境体験学習事業である。“浜を育てる事業”である。たとえば海・川への親水性を高める環境づくりをめざす研究・提言や、行政との協働事業である」という。
- 4) ふれあい配食は、この西宮市だけではなく、尼崎市や伊丹市など兵庫県下にみられるものである。

参考文献

- 川村匡由『ボランティア論』ミネルヴァ書房、2006年
- 三谷はるよ『ボランティアを生み出すもの』有斐閣、2016年
- 西山志保『ボランティア活動の論理』東信堂、2005年
- 日本おもちゃ病院協会ホームページ、<https://www.toyhospital.org/about/service>、「日本おもちゃ病院協会とは」、閲覧日 2021年6月5日
- 日本西宮市健康福祉ホームページ、<https://www.nishi.or.jp/kenko/koreishafukushi/ikigai/kaigo-yobo.html>、「介護予防事業 西宮いきいき体操」、閲覧日 2021年6月5日
- 日本西宮市町別年齢5歳刻み住民基本台帳人口ホームページ、<https://www.nishi.or.jp/shisei/tokei/jinko/daichojinko5.html>、「令和3年（2021年）3月末現在町別年齢5歳刻み住民基本台帳人口」、閲覧日 2021年6月19日
- 桜井政成『ボランティアマネジメント』ミネルヴァ書房、2007年
- 田中共子・兵藤好美・田中宏二「高齢者援助ボランティアにおける活動の動機と効果—ソーシャルサポートの交換の視点を中心に—」『文化共生学研究』5号、2007年、p.66
- 鳥越皓之「ボランティアな行為と社会秩序」佐々木毅・金泰昌編『公共哲学7』東京大学出版会、2002年、pp.231-239
- 海野和之『社会参加とボランティア』八千代出版、2014年
- 伊藤忠弘「ボランティア活動の動機の検討」『学習院大学文学部研究年報』58号、2011年
- 湯艶「日本における高齢者ボランティア研究の現状と課題」『大手前大学論集』20号、2021年
- 森保文・森賢三・犬塚裕雅他「参加したいボランティア活動の種類と動機の関係」『ノンプロフィット・レビュー』1号、2010年